

ソ連側の防禦戦闘



古是三春

§ 第2次大戦最大の会戦だったクルスク戦

1943年7月5日から8月半ば以降（ソ連軍のハリコフ奪回前後）まで、クルスク突出部をめぐる独ソ両軍によって繰り広げられた会戦は、地形的な範囲から見ても参加兵力面から見ても、第2次大戦最大の戦いであり、1991年の湾岸地上戦が起こるまで、一作戰として歴史上も最も大量の機甲部隊が参加したのもであった。

かつて手頃にまとまった戦記シリーズとして、広く読まれたサンケイ新聞社出版局の第2次世界大戦ブックス第34巻『クルスク大戦車戦』の訳者あとがきで、加登川幸太郎氏は、クルスクの戦場の広さについてこう解説されている。

「…日本の地図で、陸地のいちばんひろい所でなぞらえてみると、つぎのようになる。

まずハリコフを伊豆半島の南端と仮定すると、ベルゴロドは藤沢市付近、クルスクは桐生市付近、オリョールはずっと北方、福島県の喜多方の北西方にあたる。

そこで独ソ両軍の戦線をこれにあてはめると、南の戦線は藤沢市〔ベルゴロド〕東方の三浦半島から国鉄（いまのJR）横浜線を通り、中央線にそって北西に進む。北の戦線は栃木・福島の県境山間地帯の北である。

地図なりにクルスク突出部を描くと、東京都・埼玉県・神奈川県が南の主戦場、栃木県北西部・群馬県北部が北の主戦場で、そのほか群馬県前部、新潟県の大部分、長野県の東半分、山梨県の大部分がこの突出部に含まれ

る。

これを防衛するソ連軍の2コ方面軍の戦線は、中央方面軍が306km、ボロネシ方面軍が244km、合計すれば550kmで、東海道線の東京～大阪間の距離になり、このスケールの大きさは、さしものスターリングラードの戦いも比べものにならない。…」

日本列島でいえば、南北の関東地方全部と東海地方、甲信越地方の半分程度を含む広大な地域で、ドイツ、ソ連両軍合計で約270万名の兵員と約8000輛の戦車・装甲車輛が激突したのである（現在の自衛隊の総兵力の10倍以上、機甲兵力では約8倍である！）。

ドイツ軍は、クルスクの戦いにおいて同年3月のハリコフ地区での勝利の総仕上げをし、スターリングラードでの敗北以来拮抗している独ソ両軍の力のバランスを再びドイツ側に有利な状況に転換することを狙った。そのためにロシア軍約200万名の兵力が充満したクルスク突出部を挟撃して戦線をもぎ取ろうとしたのである。

そして、その結果は、戦術的にドイツ側がいかに優れた戦いをしたとしても、作戦目的を達することはできず、逆にその後のソ連軍側の反攻作戦を可能にして、ドニエプル川に戦線を後退させるきっかけを作ってしまう、ドイツにとって戦争の敗北を決定づけるものとなったのは、歴史上誰も否定できない事実である。

本稿では、特集のもう一方の記事で白石 光氏が執筆されているクルスク会戦の経過を追ったスケッチを裏付ける意味で、ソ連側の作戦や戦術の技術的側面とその背

景について分析してみたい。

§ 防勢に立つ決意をしたソ連軍

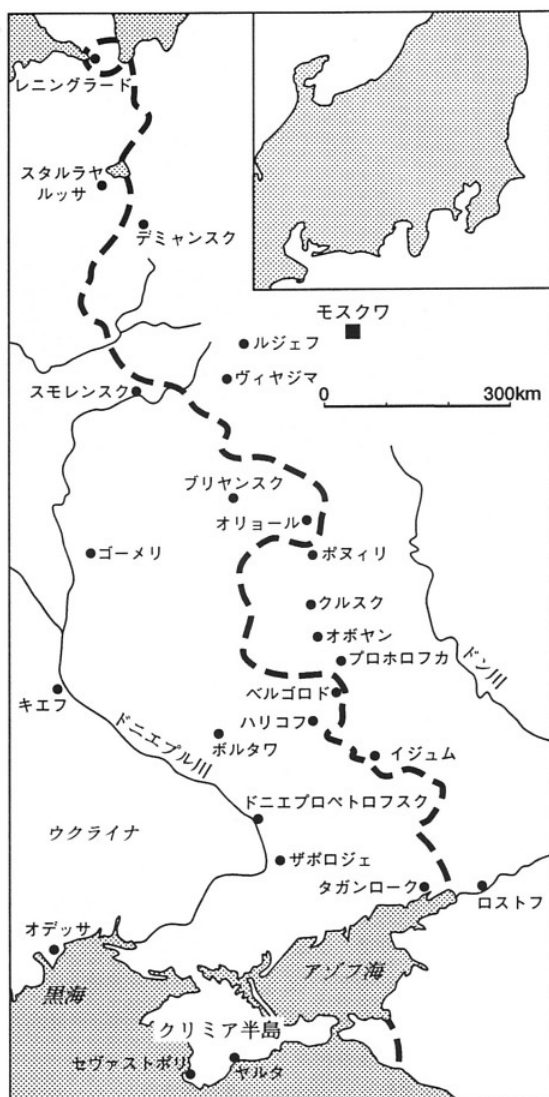
1943年前半の東部戦線は、独ソ両軍にとって実に劇的な展開をした時期であった。

1月末から2月初めにかけ、前年からスターリングラード市周辺で包囲されたドイツ第6軍及び同盟軍がソ連軍に降伏してドイツ軍戦線に大穴が空き、勢いに乗ったソ連軍は争奪の地であったウクライナ共和国第一の工業都市ハリコフに進撃。しかし、このため突出したソ連ヴォロネジ方面軍及びブリャンスク方面軍と南西方面軍の一部、計約50万名の兵力は、名将マンシュタイン元帥率いるドイツ南方軍集団の挟撃を受け、戦死・行方不明・戦傷等で計24万名もの大損害を出して壊走させられてしまった。

また、1942年までの“カタストロフィー”的状况で、失われていた機甲戦力を、ウラル東方に疎開した工場の操業再開による懸命の努力で回復しつつあったのに、虎の子のソ連第5親衛戦車軍を壊滅させるなど、ハリコフをめぐる戦いの前後で数千輦もの戦車を失ったことは、ソ連側に大きな打撃となった。

この時、ソ連軍戦線の全面崩壊の危機を救ったのは、春の訪れによる泥濘の季節であった。草原も道路も雪溶けによって泥沼と化す中、ドイツ機甲部隊の活発な行動も停滞していき、追われ続けていたソ連軍もようやく一息つくことができた。

こうした経過で、ソ連軍はハリコフからベルゴロドにかけての地区、及びオリョール地区の戦線を削られ、クルスク地区を中心に突出した防衛線を形成することになったのである。これは、戦況の推移で偶然で上がった



クルスクを中心としたソ連の地図で、日本と比較するとその広さが実感できよう

クルスク戦におけるソ連軍主力戦車T-34/76の41年型。この頃はその威力にもかげりがみえてきた





前線への投入を前に、士気を鼓舞するソ連軍歩兵部隊

ものだが、春以降の戦いの焦点になるであろうことは独ソ両司令部にとって明白に認識されていたのである。

クルスク突出部は、ソ連側にとってはハリコフ再奪回のための出撃拠点となるべきものであり、ドイツ側にとっては、ソ連軍のドニエプル川に向けたスプリング・ボードとなる戦線に突き出した剣先のように感じられたからだ。

§ 3層の強力な陣地帯を形成

ソ連側のクルスク突出部防衛のための準備作業は、ハリコフ地区での戦いが落ちついた4月半ばには開始されていた。またこの頃、ドイツ陸軍総司令部でも、クルスク突出部地区での攻勢作戦「ツィタデル（城塞）」の作戦計画案ができあがり、4月15日にドイツ国防軍最高司令部命令として発令されたところだった。

ソ連大本営（スタッフカ）は、来たるべきドイツ軍の夏季攻勢がティーガー重戦車やパンター戦車、フェルディナント自走砲等、新型の強力な装甲兵力を先頭に砲火大作戦全般を指揮したG.ジューコフ元帥（左）と防衛戦を承認したI.スターリン首相（右）



力と航空兵力を組み合わせた本格的な大攻勢になると予測し、ソ連軍兵力を集中して工兵の力で野戦陣地構築を進めるのみならず、周辺住民の労働力を全面的に活用してクルスク突出部を一大要塞に化すことを決定した。

この決定を受け、早くも4月に開かれたソ連共産党クルスク州党委員会総会は共産党員を先頭に、地域の全勤労者の力を結集して防禦陣地や野戦飛行場の構築、部隊移動用道路の建設と復旧、大会戦に備えた病院施設の拡張や州内各企業、コルホーズ（集団農場）の輸送力を活用した物資や負傷兵の輸送機構の組織を図ることを決定し、住民こぞっての組織化にとりかかった。

「防衛線を建設し、ひとつひとつの町、ひとつひとつの村、ひとつひとつの鉄道駅に防禦施設を設けることは、わが州の全勤労者の任務です。…決戦が近づいています。私たちが、防禦施設を速やかに構築すればするほど、それだけいっそう容易に赤軍は敵の抵抗を打ち砕き、敵を撃滅し、われわれの国土から駆逐するでありましょう」（ソ連共産党クルスク州委員会機関紙『クルスカヤ・ブラウダ』1943年6月13日付掲載の「クルスク州勤労者に訴える」より）。

この共産党州委員会、及び地方行政機関の取り組みにより、4月中には10万5000人のコルホーズ農民、事務職員、主婦や青少年らがソ連中央方面軍及びヴォロネジ方面軍の防禦施設の構築作業に従事するようになり、これが6月初めには30万人に達したのである。これらの人員がおおよそ3カ月にわたり、中央方面軍及びヴォロネジ方面軍の防禦地帯に、3層にわたる対戦車防禦拠点巣を軸とした防衛ラインを構築した。

陣地構築作業は、夏に近づき地面が乾燥するにつれ、困難さを増した。というのは、この地方特有の粒度の密な粘土質の土壌は、水分が失われるとコンクリートのよ

うに固くなり、シャベルを受けつけなかった。結局、塹壕掘も、先にツルハシで地表面からある程度の深さまで碎いて掘り下げなければならず、動員された女性達にとって容易な作業ではなかった。しかし、主に民間人員動員による昼夜兼行の作業で、中央方面軍の戦線だけで総延長5000kmに及ぶ塹壕や交通壕、対戦車壕が掘られた。

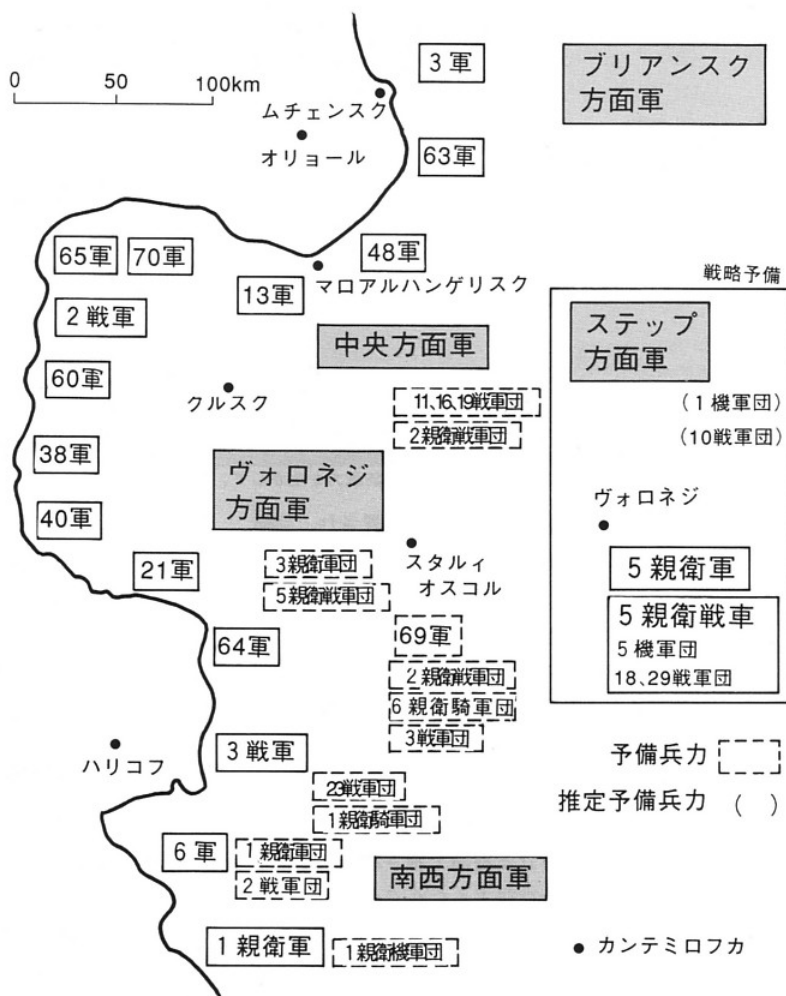
§ 対戦車防禦を考慮した縦深陣地

方面軍工兵隊の監督下、民間動員で構築された防禦地帯は、第1線から第3線まで総縦深250～300kmに及び、各線には受持ち範囲を決めた狙撃師団を配置して対戦車砲や対戦車銃を組み合わせた火点巣、縦深のある対人・対戦車双方を組み合わせた地雷原、重層した鉄条網地帯、地下壕陣地やよく偽装されたトーチカ等による防禦拠点が、各師団ごとに7～12カ所も設けられていた（別掲図参照）。

各防禦拠点には、45mm～76.2mm口径の対戦車砲・野砲が3～5門、5丁以上の14.5mm対戦車銃、支援用の82mm～120mm迫撃砲が2～5門、及びこれらの火砲を直接防禦するための重機関銃小隊や自動小銃小隊が配置されていた。

また、とくに重要と思われる地区の防禦拠点には、最大12門の対戦車砲が配置された。防禦拠点内の火砲及び各防禦拠点同士は、互いに十字砲火を形成できるよう計算して配置されており、これが装甲が強化されたドイツ戦車を迎え撃つ上で大きなメリットとなった。というのは、ひとつの火点または拠点に向けてドイツ戦車隊が攻撃すると、必ず側面を別のソ連側拠点から砲撃されるといったことになったからである。

ちなみに、クルスクで初めて実戦に投入されたパンター戦車は、故障による損失が多かったといわれているが、戦闘損失では80mm厚の前面の傾斜装甲を貫徹されたケースはあまりなかったものの、砲塔や車体の側面や後面

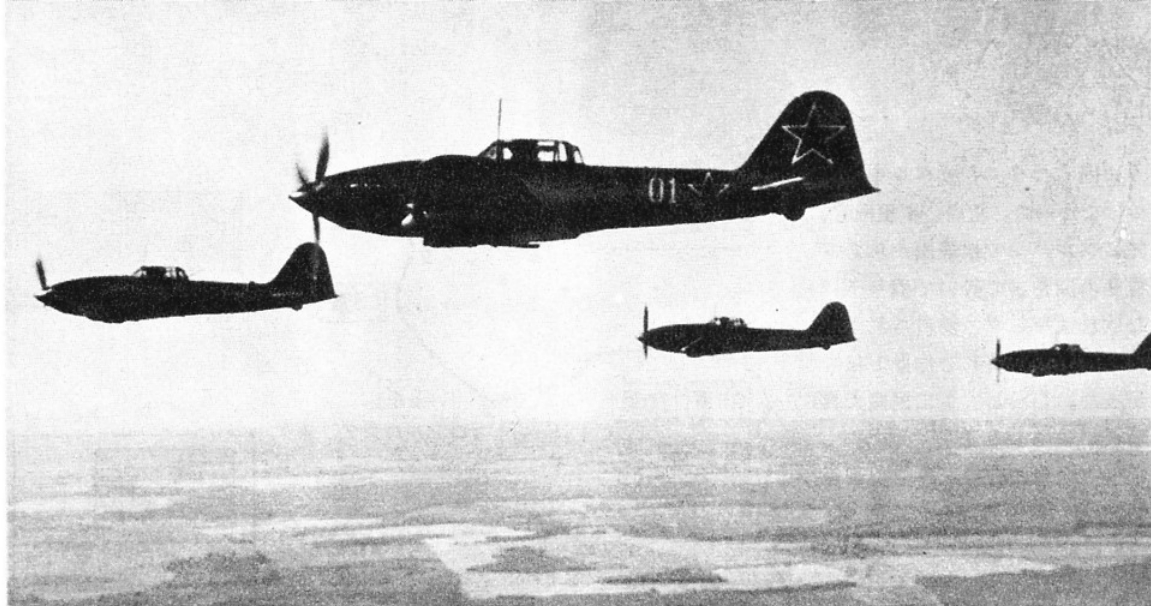


赤軍の兵力配置図

を76.2mm野砲や45mm対戦車砲の徹甲弾で貫徹されたケースがほとんどを占めた。

また、第2線や第3線の防禦拠点周辺には、車体を壕中央本面軍司令官C.ロコソフスキー大将（左）と第5親衛戦車軍司令官ロトミストロフ中将（右）





ソ連空軍のIl-2は、その強力な防禦力を生かして、低空攻撃により多くのドイツ軍車輛を撃破した

にダググインさせたT-34戦車等が数多く配置され、突破したドイツ軍部隊に対する機動防禦に備えていた。これらは、攻撃側の制圧砲火にも強靱さを発揮し、防禦火点としても大変に有効だった。

その他、これら陣地の火点周辺に配置されたロシア歩兵達も、ドイツ戦車にとって危険きわまりない敵であった。彼らは陣地構築中から火炎瓶や対戦車手榴弾による対戦車肉薄攻撃の徹底した訓練を受け、とくに塹壕や地下壕で敵戦車をやり過ごす戦術を身に付けるため、塹壕内の頭上に戦車を走り回される特訓を施された。戦車に対して抱きがちな恐怖心を克服するためである。

こうして訓練された歩兵たちは、時に対戦車砲の集中砲火以上の戦果をあげることがあった。ポヌイリ鉄道駅

周辺では、最大の攻撃力と防禦力を誇ったドイツ軍のフェルディナント自走砲数輛が地雷原に突っ込んで立ち往生したまま歩兵の肉薄攻撃を受け破壊されたのである。

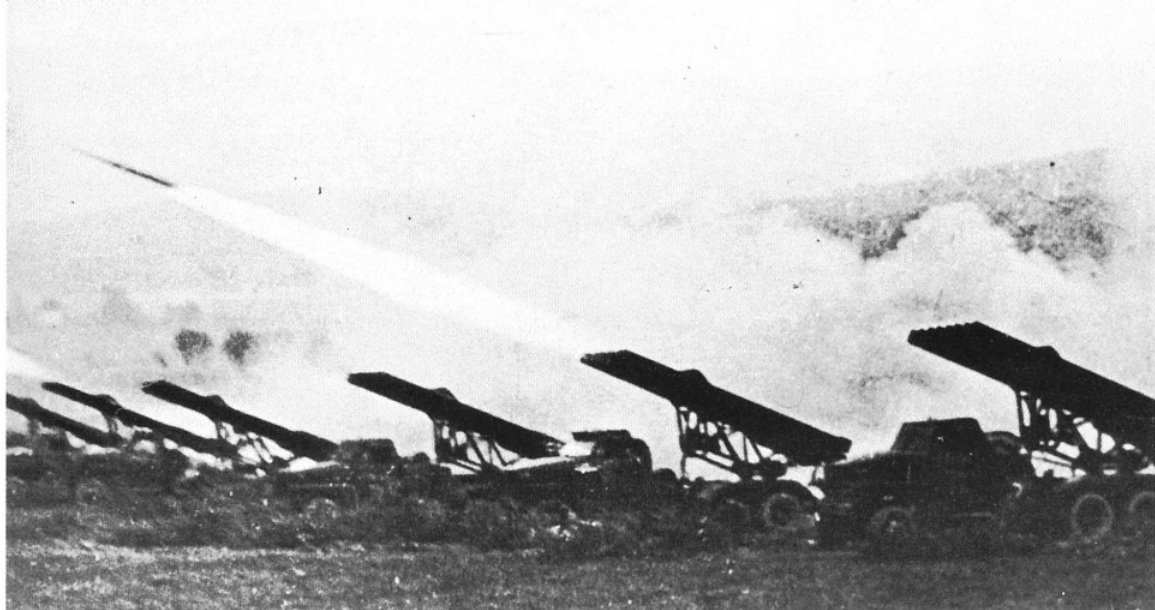
こうした肉薄攻撃による対戦車戦闘は、ソ連軍が1939年にノモンハンで日本軍と対戦したさいに精強な日本歩兵にいやというほど“教育”されたものである。

§ 兵力配備の平均化は防禦側の弱点

こうして、広大な突出部はクルスクを中心に濃密な防禦地帯と化したのであるが、ソ連側はここに191万361名からなる3コ方面軍—中央、ヴォロネジ、ステップ（予備）を配置したのであるが、この兵力数は攻勢側のドイツ軍78万900名の2.4倍にあたる。また、戦車・自

ドイツ軍に対して強力な火力を持って砲撃を行なうソ連軍野砲部隊





カチューシャと呼ばれたソ連軍の自走ロケット砲。射撃精度などには難があったが、ドイツ軍歩兵に与えた精神的な影響は非常に大きかった

走砲についても、ドイツ側の2928輜に対して、ソ連側は5128輜と1.8倍の数量を配備することができた。

しかし防禦側の常として、守勢に立つ以上、作戦展開のイニシアチブは攻勢側が握っており、いかなる場所をどのように攻撃するかはドイツ側の出方次第であった。

確かに偵察情報や戦略的考察により、ドイツ軍がどこをどのように攻撃するかをソ連側が予測していなかった訳ではなく、予想攻撃正面を特別に増強する措置をとっていたが（中央方面軍区域では第13軍担当地域がそれにあたり、方面軍司令官のロコソフスキー大將は、ここに重砲700門を持つ第4突破砲兵軍団を増加支援のために配備したが、この措置は大変有効なものとなった）、実際の作戦展開の中でドイツ側の迂回攻撃も予想しえたので、防禦配置の基本はクルスクを中心に全周防禦に立ったまんべんのない兵力配置とならざるを得なかった。

こうなれば、攻撃側の兵力に対して2.4倍程度の優位

を持っていた、実際に攻撃の矢面に立つ戦線では必ずしも兵力的に優位を保てないのは当然のことで、中央方面軍の防禦地域では、ポヌイリ地区でドイツ側が兵力面で圧倒的な優位に立って攻勢をかけることができたのである。

また、名將マンシュタインが攻めるヴォロネジ方面軍区域では、防禦側部隊の境界域を突いた適確かつ重点的な攻勢によりそうした傾向はより強まり、潰滅的な打撃を受けるソ連軍部隊が続出した。

これは、防禦側がその兵力配備を平均化せざるを得ないという普遍的な事実によるものでもあるが、そこから生み出される弱点をどう補うかがソ連側の腕の見せどころであり、彼らはそれを、前述した防禦火点を軸にした縦深陣地に拠った戦闘と、支援の重砲兵の集中防禦砲火で果たそうと考えたのである。それは少なくとも、中央方面軍の区域では成功をおさめることができた。

突撃するソ連兵。クルスク戦も最後の結果を出したのはやはり歩兵達であった





進撃するT-34/74 42型と、Su-85突撃砲。クルスク戦のもうひとつの主役が彼等だった

しかし、ヴォロネジ方面軍の区域ではそれが成らず、反転攻勢と最悪の事態に備えていた予備兵力（ステップ方面軍）から第5親衛戦車軍を割いて急派し、プロホロフカでSS機甲軍団にぶつけざるを得なくなったのである。

§ 戦車部隊の大損失とプロホロフカの実相

以上のように、地上における防禦施設構築やその戦術的準備の面では、ソ連軍はかつてなく綿密かつ長期にわたる作業を継続し、この大戦でかつて見られぬほどの要塞地帯を平原に造りあげたのである。読者によってはこ

草むらに隠れて前進するソ連軍歩兵



れを「ロシア人らしい大げさなほどの用心深さ」と思われるかも知れないが、彼らをこれほどまでに駆り立てたのは、1942～43年の戦いでイヤというほど味わわれたドイツ軍の戦術面での卓越した力量と装備の質的優位性である。

とくに、1943年の前半期に顕著になったのは、戦争初期にソ連側がドイツ側を驚かせた戦車の質的な優位性が完全に逆転したことで、強力な8.8cm戦車砲を搭載したティーガー重戦車の登場はもとより、数的に主力であったIV号戦車も砲身長48口径7.5cm戦車砲KwK40を搭載したH型となり、攻撃力・防禦力共にT-34中戦車やKV-1S重戦車を上回るものとなっていたのである（当時の独ソの主要戦車砲等の対戦車威力は、別掲表参照）。

この頃になると、ソ連の戦車は、ドイツ戦車にアウトレンジされながら必死に接近戦闘を行なうために犠牲を払って突進することが通例の戦術となり、多くの場合、勝利を得ることができなかったのである。

そこでクルスク突出部の防禦地帯では、この質的に強力なドイツ戦車を無力化するために、多数の対戦車砲火と火炎瓶や対戦車手榴弾（RG-40成形炸薬投擲弾等）を手にした歩兵が待ち受ける縦深陣地帯を構築したのである。

それにしても、クルスク防衛戦ではソ連戦車も座して防禦砲火を開くだけをこととする訳にもいかず、突破を図るドイツ装甲部隊に対する反撃を幾度か試みている。その最大のものがプロホロフカ村周辺で7月12日以降展開されたロトミストロフ中将の第5親衛戦車軍による攻勢作戦だが、このクルスク戦の時期（7月5～14日前後）では、いずれも成功を納めたといえるケースはなかった。



撃破されたソ連軍のT-34/76。クルスク戦ではごくありふれた光景であった。戦略で破れたドイツ軍だが、戦術面ではソ連軍を圧倒していた

例えば、中央方面軍戦域で攻防の焦点となったボヌイリ村及び鉄道駅周辺の戦いでは、フェルディナント自走砲部隊を中心に100輦以上の戦車・自走砲を投入したドイツ軍に対し、機動予備として同地域の後方に配置されていたソ連第3戦車軍団の一部が反撃をしかけた。

しかし、反撃に出た約1コ旅団のT-34戦車とT-70軽戦車の多くがボヌイリ駅周辺の草原に味方工兵がしかけた地雷原に突っ込み、同様にこの地雷原で立ち往生したフェルディナント自走砲と仲良く枕を並べて擱座してしまったのである。

同様なことは、第19戦車軍団のところでも発生し、防禦拠点の対戦車砲火で攻撃の足が止まったドイツ戦車

群に対して反撃に出たM3リー戦車やT-34戦車が、やはり防禦施設の不案内から味方の地雷原によって“阻止”され、戦う前に多くの損失を出してしまった。

これらの事実は、事前に防禦計画を戦車部隊が飲み込んでおらず、また彼等に対して地雷原の配置状況など必要な情報を提供していなかったという運用側の未熟さを示すもので、まだまだ1943年夏の時点では、ソ連戦車部隊の腕前のほどはドイツ軍側に全く及ばないということを示している。

確かに戦場では信じられないような過誤が起きるものだが、ドイツ軍側では消耗のために機甲部隊の練度が落ちた1944年以降にそうしたケースがよく見られる。や

戦車、砲兵そして歩兵が一体となって攻撃するのは、ソ連軍の常套手段であった





76.2mm野砲を牽引して
前線に到着したM3A1偵
察装甲車

対戦車銃を搭載して前線
に向かうソ連軍のジープ。
対戦車銃は意外なほど
ドイツ戦車に損害を与
えている▼

はりこうした過誤の根本原因は、“未熟さ”である。

そして、このソ連戦車部隊の置かれた状況というもの
は、従来、華やかなエピソードとして伝説的に語られて
きたプロホロフカでの大戦車戦の実相にも如実に現れて
いるのである。

この戦いは、「双方から1000輛以上の戦車・自走砲が
参加し、火力と防禦力に勝るティーガー重戦車を主力と
するSS機甲軍団に対し、ソ連第5親衛戦車軍がプロホロ
フカ村まで長駆転進して反撃を加え、T-34の機動性能を
生かして“相討ち”状況に持ち込んだ」というのが、通
例の戦記の結論であった。

実際に1943年7月12日から、オボヤン地区プロホロフ
カ村でぶつかったのは、SS第2機甲軍団のライブシュタ
ンデルテ・アドルフ・ヒトラー師団（LAH）の90輛の
戦車・自走砲とソ連第5親衛戦車軍の630 輛の戦車・自

走砲である。ちなみに、LAHに在籍するティーガー重
戦車は13輛であったが、この時実働していたのはたっ
たの4輛（ヴィットマンSS中尉の小隊）で、あとは60
輛以上のⅣ号戦車とわずかな数のⅢ号戦車、それにマー
ダー自走砲等がその実勢だった。もちろん、パンター戦
車は1輛もない。

反対に、ソ連第5親衛戦車軍は21輛のチャーチルMk.
Ⅲ歩兵戦車、304輛のT-34、約180輛の軽戦車、その他
自走砲等からなる戦力を持っており、7月12日朝より
LAH師団が布陣するプロホロフカ村の西南地区に向け
て攻撃を開始した。

しかし、この攻撃を阻止する上でLAH師団の奮戦以
上に貢献したものがあった。それは、プロホロフカ前面
からオボヤン南部を守るためにソ連側が構築した規模の
大きな対戦車壕である。深い谷のように長く連なる壕に





は、ところどころに部隊移動のための地橋部が構築されており、ここが独ソ両戦車部隊の攻防の焦点となった。ソ連戦車隊は、数波にわたって地橋部に殺到しようとしたが、周辺の地形の凹凸を利用して伏撃するLAH師団の対戦車自走砲やIV号戦車によって次々に打ち取られていき、12日夕刻に攻勢が潰えるまでにソ連側は200輦以上の戦車を失った。

ドイツ側の記録によれば、ソ連戦車はろくに周囲に注意を払いもせず、やみくもに発砲しながら地橋部に列をなして殺到してきたという。

プロホロフカ村周辺での両者の戦いは14日まで続くが、それまでにソ連側が最近発表したデータによると、第5親衛戦車軍は256輦の戦車・自走砲を失い、374輦の戦力を7月14日時点で維持しているに過ぎなかった。

反対に、LAH師団は撃破された戦車の復旧もあってのことだが、同時点で88輦の機甲戦力を維持しており、

プロホロフカ戦車戦開始時点と数量的には変わらない兵力を保っていたのである。戦術的勝利をどちらがおさめたかはあまりに明白だ。

プロホロフカの戦いの実相から浮き上がってくるのは、この時点ではいまだソ連戦車兵は歴戦のドイツ戦車兵達と対等に戦える技量がなかったということ、そして76.2mm戦車砲を搭載するT-34戦車は、改良型のIV号戦車に対しては力不足となってしまったということである。もちろん、自軍が構築した戦車壕に攻勢を阻止されたに等しいという事実は、これも上級司令部の運用上の未熟さの表れに他ならない。

筆者はしかし、それでも7月12日時点でソ連第5親衛戦車軍がプロホロフカ周辺に現れ（彼らは3日間で300数十km彼方のステップ方面軍の配備地区から長駆移動し、直ちに戦闘を開始した）、ほとんど敗北に等しい打撃を受けた後でも、兵力の半数以上を同地で維持してい

ソ連軍もT-34をベースとした自走砲 Su-122 を投入して対抗した



ソ連軍に撃破された第654重駆逐戦車大隊所属のフェルディナント。損害も多かったが、500輦以上のソ連軍戦車を撃破している

たことの意義と功績は大きなものと考えている。ヴォロネジ方面軍にとっての防衛の大黒柱だった第6親衛軍及び第1戦車軍がほぼ壊滅し、オボヤンに向けてろくな防衛戦力のない状況では、彼等なしにクルスク南部戦線はどうなったかわからなかったといってもよい。

§ ソ連側の損失決算書

さて、今度は最近の公表資料で明らかにされたソ連軍の正確な損失データから、戦いの様相を眺めてみよう。出典は、1993年以降に全面的に解禁されたソ連国防省秘密文書公開に基づいてG.F.クリヴォシェエフ中將が編集した『20世紀におけるソ連の犠牲者・戦闘損失』（英語版、ロンドン・グリーンヒル社刊／1997年）である。

同書では、クルスク戦におけるソ連軍の損失を中央方面軍（43年7月5～11日）、ヴォロネジ方面軍（43年7月5日～8月22日頃）、ステップ方面軍（43年7月9～23日）の区分でまとめている。

これによると、中央方面軍の戦闘兵力73万8000名に対し損失は3万3897名（戦死、戦傷・病、行方不明）で4.6%、ヴォロネジ方面軍の戦闘兵力53万4700名に対し損失7万3892名（同）で13.8%にもぼっている。ステップ方面軍の総損失は、7万58名で、3方面軍あわせて17万7847名の損失となっている。

ここで目立つのは、ヴォロネジ方面軍の損失数と率の高さで、予備兵力であるステップ方面軍からの増援も表記の期間ではほとんどがホト將軍率いるドイツ第4機甲軍との対決に投入されたので、この損失の約7万名と合計すると同地域だけで14万名以上の損失を出していることになる。

これは、クルスク北面の中央方面軍の損失の3倍以上にあたることになり、マンシュタイン元帥麾下のドイツ

軍部隊の激しい戦いぶりが伺える数字である。

実は、このヴォロネジ方面軍の高い損失率は長年の間、ソ連政府によって隠されていた。というのは、同方面軍を司令官のバツーチン大將と共に指導したのが当時の軍事会議委員（共産党代表）で後の首相となったN.S.フルシチョフだったからである。

彼の政権時代（1950年代末～1964年頃）に発刊された公刊戦史『第2次世界大戦史』（邦訳 弘文堂刊、1964年）によると、「ヴォロネジ方面軍司令部軍事会議委員のN.S.フルシチョフは、方面軍の指揮のみならずクルスク突出部全体の防衛戦について、積極的なイニシアチブを握って精力的に活動した」とされている。この「優れた指導者」が指揮に携わった方面軍の損失率が高いものであってはならなかったのである。

ひるがえって、同じ時期のドイツ側の損失はどうであっただろうか。これについては、クルスク北面で攻勢をかけた第9軍が2万720名（損失率6.2%）、南面の第4機甲軍が1万3461名（同6%）、同じくケンプフ作戦集団が1万5641名（同12.4%）で総戦闘兵力78万900名に対し、4万9822名の損失（同6.4%）である。ソ連軍の損害は、全体でこの3.6倍にもなり、とくにクルスク南面の戦いでは、ドイツ軍損失2万9102名に対しソ連側は14万3950名で、何とソ連側は4.9倍もの損失を出している。

白石氏の記事でも解説されているが、北面と南面での独ソ両軍の戦闘の様相の違いは、こうした損失決算書にもハッキリと反映されているのである。

以上をみるならば、クルスク戦はソ連の戦略的勝利で終わったといえるものの、戦術面ではとくにクルスク突出部南面においてドイツ側の奮闘が特質すべきもので、それに対して相応の被害をソ連側が被ったというのが真相であろう。

独ソ主要火砲（戦車砲含）の装甲貫徹力（mm）						
砲の種類		弾種	500m	1000m	1500m	搭載車輛
ソ連	45mm対戦車砲（砲身長46口径）		38	35	——	
	45mm対戦車砲（砲身長68.6口径）		59	54	——	
	76.2mm戦車砲F-34（砲身長41.5口径）	通常徹甲弾 硬芯徹甲弾	69 92	61 60	52 ——	T-34、KV-1
	※76.2mm野砲ZIS-3もほぼ同様値					
ドイツ	5cm戦車砲Kwk39（砲身長60口径）	通常徹甲弾 硬芯徹甲弾	57 72	44 38	34 ——	III号M
	7.5cm戦車砲Kwk40（砲身長48口径）	通常徹甲弾 硬芯徹甲弾	96 120	85 97	74 77	IV号H
	7.5cm戦車砲Kwk42（砲身長70口径）	通常徹甲弾 硬芯徹甲弾	124 174	111 149	99 127	V号
	8.8cm戦車砲Kwk36（砲身長56口径）	通常徹甲弾 硬芯徹甲弾	110 156	100 138	91 123	VI号
	8.8cm戦車砲Kwk39（砲身長71口径）	通常徹甲弾 硬芯徹甲弾	185 217	165 193	148 171	フェルディナント